



日本計量生物学会 ニューズレター

1. 巻頭言	- 1	6. 2023 年度年会・チュートリアルのお知らせ	- 6
2. 試験統計家認定制度について	- 2	7. 2023 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 6
3. 2023 年度社員総会（評議員会）議事録	- 2	8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 6
4. 2023 年度理事会議事録	- 3	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 8
5. 2022 年度計量生物セミナー・計量生物 講演会報告	- 4	10. 編集後記	- 9

1. 巻頭言「ご挨拶」

松井茂之前会長の後を受け、2023-2024 年度の会長を務めることとなりました。国際計量生物学会ならびに日本計量生物学会には育てていただき、非力は十分に認識しておりますが、計量生物学分野の発展にいくらかでも寄与できるよう努めて参ります。ご指導のほど、よろしくお願ひいたします。

中国の武漢市で新型コロナウイルスの第一例目が報告されてから、瞬間に我々の生活様式の修正を迫られるようになり、学術活動も相当に制約を受けて参りました。まだまだ新型コロナの制圧には時間が掛かると思われますが、ゴールデンウィーク明けには、五類感染症へ分類される見込みで、少しずつ学術活動も柔軟に開催できてくるのではないかと期待しています。いくらかフライング気味だったかもしれませんが、ラトビアの首都リガで 2022 年 7 月に開催された国際計量生物学会年会(International Biometric Conference, IBC)に参加いたしました。ロシアとウクライナの戦争が始まっており、ロシアの次の標的がバルト三国なのではと噂されても参りました。その影響で渡航もなかなかたいへんでしたが、Nordic-Baltic region のホスピタリティとラトビアののんびりした雰囲気、旧知の人たちと直接話せる喜びは、渡航の不安と苦勞を吹き飛ばすものでした。IBS Executive Board は対面でのみの参加を選択しましたが、600 名程度の参加者を得て、活発な議論がなされておりました。オンラインでのカンファレンスにも良い面はありますが、やはり直接の交流は学術活動には必須であるように思われました。

2022 年は IBS の設立 75 周年の節目に当たることが、IBS 前会長の Geert Verbeke 先生からも紹

服部 聡（日本計量生物学会会長, 大阪大学）

介されておりましたが、その事業として、CRC Press 社から、“The History of the International Biometric Society” (Lynne Billard 著) が出版され、ブース展示されておりました。事務局に眠っていた書簡などをもとに IBS の歴史を俯瞰したもので、設立から初代 President として Fisher 先生を選出するあたりの黎明期の様子も臨場感を持って記述されています。IBS は世界中の region からなっていて、日本計量生物学会は Japanese region としての役割を担っています。この独特な構造は IBS を特徴づけていますが、もともと設立時からそのように意図的にデザインされていたようです。National association の連合(federation)ではなく、an international society だというわけですから (Lynne Billard の 6 ページ)。各 region が抱える学術的問題を共有し解決することが、学際的研究を促進する学問領域の学会として重要との見識であろうと思いますが、現代の多様性重視の立場を予見するかのような組織デザインに感心いたします。Executive Board メンバーや委員会委員の構成、IBC の開催地決定にこのことが忠実に反映され運営され続けているのは素晴らしいことと思いますし、Japanese region からの貢献も求められると思います。

Governance への貢献も重要ですが、何といつてもいかに研究面で国際的な貢献をしていくかが重要であろうと思います。計量生物学分野は、生物学・医学・農林水産学・生態学・環境科学などに対する計量的方法を研究する分野として定義されています。同一分野内の研究者でも、応用により重きを置く方から、理論面への貢献を重視する方まで様々です。このスペクトルの広さは大いなる強みとなり得るでしょう。理論か

ら応用まで、また隣接分野でのアイデアを気軽に交流できるプラットフォームとして日本ならびに国際計量生物学会がさらに発展していくとよいと思います。本学会の会員の多くは統計的方法を基本的な道具あるいは対象として研究活動を行っておられると思いますが、昨今のデータサイエンスブームは、統計的方法の存在意義の再評価を迫っている面もあるように思いま

す。機械学習の著しい発展が目を見張りますが、他にも、非線形微分方程式と基礎医学の融合など、データ解析に対する様々なアプローチが無視できなくなってきたり、柔軟な姿勢で研究に臨む必要があるでしょう。なかなかたいへんですが、多様性に満ちた刺激的な時代にいるとも思えます。年会などでの議論を通じて楽しんでいきたいと思えます。

2. 試験統計家認定制度について

大門 貴志, 柴田 大朗, 長谷川 貴大 (試験統計家認定理事)

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を、試験統計家(trial statistician)として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会 HP をご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の2種類の区分からなり、2023年4月時点で責任試験統計家25名、実務試験統計家74名が認定されています。

今後の予定は以下の通りです。なお、2023年度の認定申請のためには2020年4月～2023年3月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。

・2023年3月:2022年度申請分 責任・実務試験統計家認定(HP公表)

・2023年5月～7月:2023年度 責任・実務試験統計家認定申請受付

・2023年10月～12月:2023年度 認定講習会(2回、定員15名程度/回)

・2023年10月:2023年度 責任・実務試験統計家(2018, 2019年度認定者)の更新受付

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内(5年間)に30単位が必要です。単位が付与される学会・セミナー(日本計量生物学会年会、計量生物セミナー、計量生物学講演会、統計関連学会連合大会、IBC)に参加された場合は、参加証等の証明書が必要となりますので、各学会等で取得後、認定の更新時まで保管をお願いいたします。なお、年会・セミナー・講演会については、試験統計家認定委員会が発行する受講証の保管をお願いいたします。

試験統計家認定の更新の申請は、有効期間内または有効期間の満了後1年以内に行ってください。

3. 2023年度社員総会(評議員会)議事録

寒水 孝司, 高橋 邦彦 (庶務担当理事)

○ 2023年度 定時社員総会

日時: 2023年3月15日(水) 17:00~18:00
場所: 東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室個室を本部とする Zoom 会議
出席: 安藤(宗), 安藤(友), 伊藤(陽), 伊藤(ゆ), 上村, 大庭, 大森, 折笠, 嘉田, 口羽, 五所, 坂巻, 佐藤, 篠崎, 柴田, 川口, 新谷, 寒水, 大門, 高橋, 田栗, 田中, 手良向, 土居, 土屋, 長島, 野間, 長谷川, 服部, 平川, 古川, 松井, 室谷, 山本(紘), 山本(英), 横田
欠席: 丹後, 船渡川, 松山, 山口
<委任状2通>

議長: 代表理事 松井茂之

出席役員
理事: 安藤友紀, 大庭幸治, 大森崇, 川口淳, 五所正彦, 柴田大朗, 寒水孝司, 大門貴志, 高橋邦彦, 田栗正隆, 手良向聡, 長谷川貴大, 服部聡, 松井茂之,
監事: 松浦正明, 山本英晴

議事の経過の要領及び結果: 上記のとおり出席があり、定時社員総会は有効に成立したので、代表理事松井茂之は議長となり、開催する旨を宣言した。定款第22条により、議事録署名人は、松井茂之氏のほか寒水孝司氏と高橋邦彦氏が選任された。

第1号議案 当期（令和4年1月1日から令和4年12月31日まで）事業報告及び計算書類の承認の件

議長は、当期における事業に関する諸報告を事業報告書により報告したのち、貸借対照表及び損益計算書を提出して、その内容について詳細に説明し、その承認を求めたところ、満場一致をもって承認可決した。

第2号議案 令和5年度事業計画の承認の件

議長は、令和5（2023）年度事業計画（案）について説明し、その承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

第3号議案 理事選任の件

議長は、当法人の理事は本総会終結をもって任期満了退任となるため、あらためて選任したい旨を述べ、その選任方法を議場に諮ったところ、出席者より議長の指名に一任したい旨の発言があり、その賛否を諮ったところ、一同これに賛成した。

議長は、次の者を指名し、その承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

理事：大庭幸治、川口淳、口羽文、五所正彦、柴田大朗、寒水孝司、大門貴志、高橋邦彦、田栗正隆、手良向聡、長谷川貴大、服部聡、船渡川伊久子、松井茂之、松山裕、横田勲
なお、被選任者は、その就任を承諾した。

第4号議案 監事選任の件

議長は、当法人の監事は本総会終結をもって任期満了退任となるため、あらためて選任したい旨を述べ、その選任方法を議場に諮ったところ、出席者より議長の指名に一任したい旨の発言が

あり、その賛否を諮ったところ、一同これに賛成した。

議長は、次の者を指名し、その承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

監事：山本英晴、安藤友紀

なお、被選任者は、その就任を承諾した。

第5号議案 会長及び会長以外の代表理事選任の件

議長は、本総会の終結をもって人氣が終わる会長及び会長以外の代表理事を選任したい旨を述べ、その選任方法を議場に諮ったところ、出席者より議長の指名に一任したい旨の発言があり、その賛否を諮ったところ、一同これに賛成した。議長は、次の者を指名し、その承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

代表理事（会長）：服部聡

代表理事（会長以外）：松井茂之

被選者は、その就任を承諾した。なお、本決議は本総会終結後に開催される、理事会の決議承認を条件として効力を発生するものとする。

第6号議案 功労賞選出の承認の件

議長は、理事会で選出された功労賞の候補者（折笠秀樹氏）を功労賞受賞者として選出することについて承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

報告事項

1. 委員会委員の選任について報告があった。
2. 2023年度予算について報告があった。
3. 会員資格の喪失7名の退会手続きについて報告があった。
4. 学会賞候補者について推薦がなかったことが報告された。

4. 2023年度理事会議事録

寒水 孝司、高橋 邦彦（庶務担当理事）

○ 2023年度 第2回対面（Web）理事会

日時：2023年3月15日（水）18:00~19:00

場所：東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室
個室を本部とする Zoom 会議

出席：服部、大庭、川口、口羽、五所、柴田、寒水、大門、高橋、田栗、手良向、長谷川、松井、横田、山本（監事）、安藤（監事）

欠席：船渡川、松山

定款第35条に従い、定足数を満たしていることを確認した後、定款第34条に従い、服部理事を議長として議案を審議した。

審議事項

第1号議案 会長兼代表理事の選任

議長は、当法人の会長兼代表理事は、本日開催の定時社員総会終結をもって任期が満了となり、あらためて理事が選任されたことに伴い、会長兼代表理事を選定したい旨を述べ、慎重協議した結果、全員一致をもって、次のとおり選定した。

会長兼代表理事 服部聡

なお、被選任者は、その就任を承諾した。

第2号議案 会長以外の代表理事の選任

議長は、当法人の会長以外の代表理事は、本日開催の定時社員総会終結をもって任期が満了となり、あらためて理事が選任されたことに伴い、会長以外の代表理事を選定したい旨を述べ、慎重協議した結果、全員一致をもって、次のとおり選定した。

会長以外の代表理事 松井茂之

なお、被選任者は、その就任を承諾した。

第3号議案 役員構成(担当理事・各委員会委員)

議長は、あらためて理事が選任されたことに伴う役員構成(担当理事、各委員会委員)について説明し、その承認を求めたところ、満場一致をもってこれを承認した。

第4号議案 編集：計量生物学特集号

計量生物学の特集として「生存時間データ解析法(仮)」の提案について、全員異議なくこれを承認した。

第5号議案 編集：企画委員公募

企画委員を学会員から公募することについて、全員異議なくこれを承認した。

第6号議案 編集：企画：トピック公募(目安箱設置)

企画のトピックを公募すること(目安箱の設置)について、全員異議なくこれを承認した。

報告事項

(1) 編集関連

計量生物学43巻1号の発行状況、2号の印刷状況、44巻1号・2号の投稿状況が報告された。

(2) 企画関連

2023年度統計関連学会連合大会の準備状況が報告された。

(3) 広報関連

広報委員会の組織、引き継ぎ関連(引き継ぎに関する会議、各担当理事への依頼事項)、2023年度の活動計画が報告された。

(4) 理事会用パスワードの変更

2023年度の理事会用のパスワードが報告された。

5. 2022年度計量生物セミナー・計量生物学講演会報告

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲(企画担当理事)

2022年12月8日(木)、9日(金)午前計量生物セミナー「生存時間解析」(オーガナイザー: 江村剛志(久留米大学)、長谷川貴大(塩野義製薬)、田栗正隆(東京医科大学))を現地会場として中央大学 後樂園キャンパスにてハイブリッドで開催しました。プログラムは以下の通りでした。

12/8(木)1日目

生存時間解析の基礎: 長島健悟(慶應義塾大学)

比例ハザード性を前提としないセミパラメトリック推測: 服部聡(大阪大学)

競合リスクがある場合の基礎的な解析方法: 西川正子(東京慈恵会医科大学)

マルチステートモデル 考え方編: 室谷健太(久留米大学)

マルチステートモデル 実装編: 斉藤哲雄(荒尾市民病院)

周辺モデル・Frailty・コピュラ: 江村剛志(久留米大学)、杉本知之(滋賀大学)

セミ競合リスク・相関のあるエンドポイントへのアプローチ: 杉本知之(滋賀大学)、江村剛志(久留米大学)

疑似値による解析: 小向翔(大阪大学)

12/9(金)2日目午前

ランダム化比較試験の症例数設定と解析: がん領域のプラクティス: 野村尚吾(東京大学)

ランダム化比較試験の中間解析: がん領域のプラクティス: 平川晃弘(東京医科歯科大学)

重み付きlog-rank検定とRMSTの基本的な性質: 長谷川貴大(塩野義製薬)

Applications and recent methodological developments of RMST (RMSTの応用と最近の方法論の発展): 宇野一(Dana-Farber Cancer Institute/Harvard Medical School)

参加者は344名で、生存時間解析に関する話題が幅広く扱われたことで、質疑も盛り上がり、大変盛況となりました。1日目は、長島健悟先生が生存時間解析の基礎を分かりやすく解説し、その魅力もあわせて伝えられました。次に、服部聡先生が加法ハザードモデル、比例オッズモデル、加速モデルといった代表的なセミパラメトリック回帰モデルの推測を説明しました。また、無作為化臨床試験における誤特定Cox比例ハザードモデルによる推測についても解説しま

した。西川正子先生は競合リスクが存在しているのに、それが考慮されていない事例が多く、その課題を紹介すると共に、競合リスクがある場合の基礎的な解析方法を紹介しました。室谷健太先生は遷移確率、時間不均一マルコフ性、状態占有確率、制限付き平均滞在時間、状態間の遷移ハザードを基礎としたマルチステートモデルの概論を解説し、齊藤哲雄先生はマルチステートモデルの実装紹介として、R コードでの具体的な指定例、及び出力結果の解釈を解説しました。江村剛志先生と杉本知之先生は、Frailty-Cox モデル、周辺 Cox モデル、Copula+周辺 Cox モデルといった 3 つの多変量生存時間モデルにはじまり、セミ競合リスクと複数の生存時間型エンドポイントの相関評価方法を紹介しました。小向翔先生は、生存時間データに対する疑似値に基づくパラメータ推定を解説し、競合リスクを伴うデータ、マルチステートモデルでの疑似値の応用、及び疑似値によるモデル診断までを

含めて幅広く紹介しました。

2 日目の午前中は、野村尚吾先生ががん領域の無作為化比較試験で頻用される必要被験者数の算出方法を解説すると共に、非劣性マージンの適切性も含めた非劣性試験での適用例も含めて紹介しました。平川晃弘先生は、群逐次デザインによる有効性中止、及び無益性中止を伴う中間解析の方法を解説し、生存時間型応答での適用例を紹介しました。長谷川貴大は、優越性試験で比例ハザード性が成り立っていない際の課題を整理し、重み付き log-rank 検定による検定手法での対応と境界内平均生存時間 (RMST) などによる要約指標による対応を紹介しました。宇野一先生は、RMST の応用的な話題として、必要被験者数計算、中間解析、境界時間の経験的な選択方法、層別解析、回帰分析、競合リスクと再発事象への対応などについて幅広く解説しました。



演者との集合写真 (計量生物セミナー)



演者の講演写真 (計量生物セミナー)

さらに、2022 年 12 月 9 日 (金) 午後には、講師として宇野一先生 (Dana-Farber Cancer Institute / Harvard Medical School) をお招きして、「生存時間に対する治療効果の定量化問題におけるモデルに依存しない方法の開発と普及」をテーマにした計量生物学講演会 (司会: 長谷川貴大 (塩野義製薬), 田栗正隆 (東京医科大学)) を中央大学 後楽園キャンパスで開催しました。

参加者は 111 名であり、これまでに携わられた宇野先生の経験をもとに、治療効果の大きさの推定における、モデルに強く依存しない方法の重要

性、統計手法が統計雑誌を飛び出し実際に使われる手法になるまでの普及活動の重要性、及びその普及活動に関するチャレンジについて共有されました。また、最近開発されたモデルに依存しない新しい要約指標である Average Hazard with Survival Weight とその解釈、推測方法および性能についても紹介されました。

本セミナーと本講演会を通じて、生存時間解析の理解が深まり、今後新たな研究へと発展することが期待されます。



講師との集合写真（計量生物学講演会）

6. 2023 年度年会・チュートリアルのお知らせ

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲（企画担当理事）

2023 年度日本計量生物学会年会及びチュートリアルを、2023 年 4 月 20 日（木）及び 21 日（金）に、北海道大学 学術交流会館講堂（<https://www.hokudai.ac.jp/bureau/property/s01/>）と Zoom によるオンラインのハイブリッド形式で開催予定です（応用統計学会と共催）。計量生物学会、応用統計学会の両学会員は、本年会、チュートリアル及び同時期に開催される応用統計学会年会に会員価格で参加できます。今年度も 40 歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。また、年会期間中に日本計量生物学会総会・学会賞授与式を開催します。年会プログラム、セッションやチュートリアルの内容及び参加申し込み等の詳細については、年会 HP（<https://biometrics.ywstat.jp/2023/>）で

ご案内していますので、是非ご参加ください。

特別セッション

セッション名：「オミクスデータ解析：その活用方法・新たな広がり」

オーガナイザー：櫻井玄（農業・食品産業技術総合研究機構）

演者：福島敦史（京都府立大学）、小野木章雄（龍谷大学）、市橋泰範（理化学研究所）、永田尚義（東京医科大学）

チュートリアル

テーマ：統計的因果推論の基本と応用

講師：高橋将宜（長崎大学）

7. 2023 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

伊藤 陽一, 篠崎 智大（統計関連学会連合大会プログラム委員）

2023 年度統計関連学会連合大会は 2023 年 9 月 3 日（日）～9 月 7 日（木）の日程で開催されます。開催場所は京都大学（吉田キャンパス）を予定しており、ハイブリッド方式（現地参加を原則に、オンライン配信やオンライン会議ツールによるオンライン参加、その他）での開催として準備を進めています。チュートリアルセッション、市民

講演会、企画セッション、コンペティションセッション、ソフトウェアセッションなどを予定しています。一般講演申込の締め切りは 6 月上旬（予定）とし、それ以降に報告集原稿提出および参加の事前申込の締め切りを設定します。発表や参加を計画されている方は予定に組み込んでいただければ幸いです。

8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

8-1. アカデミアにおける生物統計家として

山本 紘司（横浜市立大学医学部臨床統計学）

現在 10 年強医学部で生物統計家として働いてきましたが、本稿ではこれまでの経験や活動を踏まえた上で、これからどのように生物統計家として貢献できる（したい）かを、僭越ながら率直に述べたいと思います。ここでは主に医学分野における統計の意で生物統計と呼ぶことにします。

私自身は学生時代および学位取得後 2 年弱は助教として、数理統計学の研究室に所属しておりました。数理統計学を専攻していましたが、生物統計にも関心があり、その後、縁あって大阪大学医学部に異動し、そこから現在に至るまで異動はありましたが、ずっと医学部に勤務しています。医学部と言っても、医学部附属病院内のいわゆる ARO 所属であったり、医学部内の講座所属であったり、その兼任であったりと様々な部署・役割を経験してまいりました。初めて病院勤務となった際にはそれまでの環境との大きなギャップにとまどいましたが、そこから生物統計家としてのキャリアが始まったと思います。

大阪大学医学部では医師主導臨床研究に生物統計家として関与することが主務（以下、ARO 業務）となり、数多くの臨床研究に携わることができました。また、統計に関するよろず相談という形でコンサルテーションも同時に行っていました。数年後には生物統計関連の寄附講座にも所属することになり、そこでは研究員や大学院生もあり、彼/彼女らの教育も行うようになりました。ひたすらに日々の業務と研究、そして学生教育をこなすことに精一杯でしたが、思えばこのときの貴重な経験があったからこそ、私自身の現在考えるなりたい生物統計家像も見えたのだと思います。

様々な考え方があることは承知の上で述べさせていただきますが、私自身が考えるアカデミアにおける生物統計家は、生物統計に関連する実務に携わり、かつ生物統計の研究者でもあることです。ARO 業務は生物統計家としての重要な仕事の 1 つであり、私自身臨床研究に第一線で関与し続

けたいと考えています。それは臨床研究に生物統計家として参画することで医療への貢献を身近で感じられる“やりがい”があるからです。しかし多くの臨床研究に関わりたいと考えるのはそれだけが理由ではなく、“生の”臨床研究に関わることで様々な課題に直面でき、その課題の中には統計的に解決可能と考えられるものもあり、これがまさに生物統計学分野の研究となるわけで、そのような研究テーマに出会えることも大きな理由です。このような課題を解決していくことは生物統計家の重要な仕事であり、生物統計家にしかできない、また、生物統計家がやらなければならないことでもあると考えています。ただし、日々の ARO 業務をこなしつつ生物統計の研究を両立していくことは並大抵のことではなく、これは身をもって実感しています。残念ながら現在もこれらのことが十分にこなせているとは言えません。

しかし、この先アカデミアにおける生物統計家が増えれば、現状では十分に対応できていないと感じている両立すべき事項も、余裕をもってこなせるような日が来るのではないかと期待しています。そのためには、とくにアカデミアに所属する生物統計家を育成していくことが重要であり、この人材育成にも注力していきたいと考えています。ご存知のとおり日本のアカデミアにおける生物統計家は一昔前に比べるとかなり増えたと思われませんが、それでもまだまだ世界的には少ないのが現状です。このような状況を改善していく一助となれるよう、これからも微力ながら尽力していきたいと思っています。

最後になりますが、今の私自身が歩んでいる道、そしてこれから歩むであろう道は、これまで出会った多くの先生方、諸先輩方、そして後輩や学生らによって支えられています。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

8-2. 非臨床開発分野に活動の場を移して感じたこと

柿爪 智行（武田薬品工業株式会社）

まず、私の経歴を簡単に述べさせていただきます。修士取得後、製薬企業に統計解析職として就職し、転職を交えながら臨床開発における統計解析担当者として約 17 年間従事しました。その後、武田薬品工業に転職し、現在は非臨床開発における統計解析に関するアドバイザーを担当しています。現在私が勤務している研究所には薬物動態や安全性等、多くの研究室があり、それぞれの研究者から相談を受けるため、多くの魅力的なプログラムに関わる機会に恵まれています。また、CMC や

バイオインフォマティクスといった、臨床開発担当時には触れたことがなかった分野についても相談を受けています。生物統計家が貢献できる範囲の広さに驚くとともに、生物統計家でよかったと改めて感じています。相談を通じて研究者と信頼関係を築き、多くの方から「相談してよかったです」「他の人にも相談に来るよう薦めておきます」と仰っていただく機会も増えました。これまでとは違う形で新薬開発への貢献を感じながら、充実した日々を過ごしています。

本稿では、これまでの経験に基づき、生物統計家が非臨床開発分野で貢献するために特に重要と感じたことを2点述べさせていただきます。非常に限られた経験に基づく個人的な意見ではありますが、「なるほどね～」と感じていただけることが何かしらありましたら嬉しく思います。

1. 相手との密なコミュニケーション

In vivo/in vitro の非臨床試験は、臨床試験よりも探索的な意味合いが強いです。とくに、非臨床開発の初期段階では、複数の化合物を投与群に設定しながら、かつ多くの評価項目を複数時点測定して、開発候補化合物の絞り込みと適切な評価項目の探索を同時に実施する試験が計画されることがあります。その一方、実施可能性の観点から、サンプルサイズは一群数例-十数例規模に設定されます。このような状況で効果的に開発を進めるためには、①統計的に100点を目指すのではなく、研究者の目的を達成するために優先すべきことを統計的観点から検討すること、②研究者と私は互いに補完しあう関係（研究者は研究分野に関する知識・経験は豊富だが統計的な知識が十分でない、一方、私は統計的な知識・経験はある程度あるが研究分野の知識がない）にあり、お互いの強みを活かすこと、の2点が必要不可欠です。これらを達成するために最も重要なことは、相手（私の場合は研究者）との密なコミュニケーションであることを日々の業務を通じて再確認しました。非臨床試験を計画・実施した際、研究者は一つの試験から多くのことを知りたいと考え過ぎた結果、真の目的を見失ったまま相談に来ることがあります。そのような時は、じっくりと話をすることで、一緒に真の目的を確認し、それを達成する

ための評価方法を明確にできました。また、相談前よりもシンプルな試験デザイン・評価方法にできたケースもありました。

2. プロジェクト全体を俯瞰的に見られる視点
私の今の業務内容は前職から大きく変わりましたが、臨床開発を担当してきた経験が役立つなと強く感じることもありました。それは、プロジェクト全体を俯瞰的に見られる視点です。前職時代の上司に、「統計担当者は第I相試験から申請・市販後まで担当するため、開発戦略を俯瞰的に見る能力を身に着けることができる。それは統計担当者の強みの一つであり、あなたもそれができるように日頃の業務で意識しなさい」とご指導いただき、それ以来ずっと意識してきました。先日、担当プロジェクト会議で議論が袋小路に入り込んでしまったことがありました。専門的な話の詳細は理解できていなかったのですが、その中でも全体的にちぐはぐさを感じた個所があったためコメントしたところ、「確かにそういう観点が抜けていたね」という話になり、議論が進むようになりました。後ほど、研究者は自分の専門分野にフォーカスしがちなので、俯瞰的な視点からコメントしてもらえるのは非常に助かるとフィードバックをいただきました。ご助言をいただいた当時の上司に感謝すると同時に、今後もこの視点を意識して業務に励もうと考えています。

最後にこの場をお借りして、これまでご指導いただいた先生、先輩方に改めて感謝申し上げます。また、今回執筆の機会を与えてくださった関係者の皆様に感謝を申し上げて本稿を締めさせていただきます。ありがとうございました。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

五所 正彦（編集担当理事）

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABESに掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、

10. 編集後記

新体制での初めての会報の発行となり、初めて編集後記の担当をさせていただきます。

2023年度の年会は、一般演題の登録が、口頭発表とポスター発表を合わせて31件もありました。これだけの数は個人的には記憶がなく、過去の記録を参照してみると、2022年度および2021年度は18件、2019年度は12件でした。今年の演題数は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となった2020年度を除いた直近3年間を大きく上回る数です。この要因は、これまで学会を支えてこられた諸先生方のご尽力に加えて、2021

上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。

これまで著者から論文掲載料をいただいていたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

年度からスタートした若手賞優秀発表賞の表彰、昨今のデータサイエンスの流行による追い風など、様々なものがあるように思いますが、いずれにしても分野に関心を持つ若い方が増えている証拠ではないかと思えます(実際に、学生会員の数は10年前と比較して倍増しています)。

会報を通じて、学会の更なる盛り上がりにつながるような情報を提供していければと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(日本の玄関口 横浜より)

日本計量生物学会会報第141号
2023年4月21日発行

発行者: 日本計量生物学会
発行責任者: 服部聡 編集者: 船渡川伊久子, 田栗正隆